

神田秀夫

芥川龍之介の「鼻」で名高い今昔物語集卷廿八、或は宇治拾遺卷二の、あの話は、私もつい、宇治から、池尾まで寄り道したことのないために、現地に何か伝承があるものやら、ないものやら、知らないのだが、禅珍とか禅智とかいふのが固有名詞ではなささうだし、内供は勿論、官名だから、伝記の考証の仕様のない男だと思ふ。といつて、全くの虚構でもないらしいことは、今昔物語集の、病状の描写で推測される。

だが又、虚構が加はつてゐるのではないかといふ疑ひも、多分に、ないことはない。源氏物語が末摘花の鼻を、普賢菩薩の乗り物といつてゐるやうに、当時、象のやうに長い鼻といふ觀念はすでにあつたはずであるからだ。

唐の段成式（一八六三）の西陽雜俎が今村与志雄氏の訳で、最近、平凡社の中国古典文学全集に収められた（「歴代隨筆集」の内）抄訳ではあるが、私はこの全集が当代中堅学者の名訳ぞろひなので、ひまをみては読んでゐるのだが、すると、その西陽雜俎の中に新羅の貴族金哥の、遠つ御祖の話があつて、旁ぼろ也いとその弟とが、日本で云つたら瘤取翁さん、花咲翁い、或は古切雀のやうな善玉悪玉を演じ、悪玉の弟が鬼につかまって、「お前の鼻を一丈ぐらゐのば

してやらうか」といはれ、鼻が「象のようになって」帰つて来、みんながその鼻を見にやつて来るので、恥かしさと憤りのあまり死んでしまつた、とある。（「歴代隨筆集」二四八―四九頁）

西陽雜俎には、もう一つある。唐の長安にすむ王布といふ百万長者の娘が、聡明な美少女であつたが「鼻の両穴から皂突さいとつの実ほどの贅肉が垂れさがつていた。その根は麻のひものごとく、長さは一寸ばかり、それに触れると、痛さが心髄にまでしみとおつた。」それを乞食の胡僧が、あつといふ間に治療して全快させると、礼金も受けず、その贅肉だけを大切さうに持ち帰つた、云々。（「歴代隨筆集」二二―九頁）これも瘤取の一変形たるに近い。

かれこれ思ひ合せると、今昔物語集卷廿八の鼻の話も、或はかういふ晩唐——平安朝初葉の語り口が、一口加はつてはゐないであらうか。

*

おなじく中国古典文学全集の一冊に「六朝唐宋小説集」がある。前野直彬氏の、これも名訳である。これには私は、あつと声をあげた。といふのは、自分の足許に火がついて来たからである。

私は搜神記は、ざつと目を通したつもりであつた。商務印書館がだ

した胡懷琛の標点本で、昭和六年に出た本だが、昭和三十二、三年にも重印されて、簡単に手にはいったものだからである。ところが、今度、前野氏の訳本にあたってみると、誤謬、見落としだらけ。全く恥かしくなってしまう。どうも、古事記と何らかの関係がありさうである。

いま、山梨英和学院(?)に勤めてゐる白川敏子君が、東京女子大を出る時、卒論に古事記の沙本の暴雨の話をとりあげ、沙本びめが生んだ王子を垂仁天皇に渡す時に、酒で着物を腐らせておいて、稻城の外に立ち出でたために、天皇の軍士、力士は、王子は受け取ることができたが、母きさきを伴れどもすことは不可能だったといふ条について、ここには何か中国の古典に原拠があるんじゃないか、と私に質問に来た。私は例のぶつきらぼうな調子で、知らないだらう、と答へたものである。ところが、今みると、それらしいものがある。

宋の康王の舍人であった韓憑の妻を、王が奪った。妻は王に従はず、自殺した夫のあとを追って、台上から飛び降りて死ぬのだが、その時「妻は自分の着物を人知れず腐らせておき、王に連れられて台へ登ったときに、その上から身を投げた。近侍の人々がつかまえたようにしたが、着物をつかみとめることができず、云々」(六朝唐宋小説集「二〇頁」)

其妻乃陰肉其衣、王与之登台、妻遂自投台、左右攬之、衣不中手而死。(卷十一)

これが原文である。してみると、垂仁記の沙本びめ物語も、あの、玉の緒を腐たし、御衣を腐たしといふ一条は、飛鳥時代、伎楽時代の潤色なので、そこには、この搜神記あたりから糸を引くものがある

ったのかもしれない。この韓憑の妻は、夫の墓に合葬してくれと遣言してゐたのであるが、王が怒って許さなかったために塚が向ひ合せに作られた。すると両方の塚から大きな梓の木が生えて来て、枝をさしかはした、といふ相思樹の話につながって行く。ところが、日本書紀の仁徳紀五十八年の条にも、痕跡だけが、やはり一種の相思樹の話が残つてゐて、似たやうな説話が或はもとあつたのではないかと推測させるものがある。

更に、この搜神記には、弟橘媛の話と同じやうに、水上で女性が神に捧げられる話がある。但し、この搜神記の場合は、神が犠牲を返してよこし、生命に別条なかったとあるが、最初はとにかく、揚子江上で、廬山の神が、航行中の家族に向つて、娘を要求し、船が進まなくなり、「水面にむしろを敷いてその上に娘をのせた。すると船は進むことができた」(六朝唐宋小説集「一六頁」、原文は「置席水中、女坐其上、船乃得去。(卷四)」)

といふものである。してみれば、倭建ノ命の東征伝説に於ける弟橘媛の話も、伝説ではあるが、その中には説話的分子がはいりこんでゐると考へなくてはなるまい。

更に、搜神記には、滎陽の張福といふ者が野中の河で、船を行つてゐると、一隻の小舟に乗じた美女が来たり投じ、張福と枕を共にした話が出て来る。真夜中になって、月が出た。張福が「女をよく見ると、大きな亀が一匹、臂枕で寝ているのである。云々」(六朝唐宋小説集「二九頁」)

このあたり、なんとなく、あの釈日本紀が残してくれた丹後風土記の佚文の浦島の話に髣髴として来るものがあるではないか。原文は搜神記の卷十九にある。亀が難しい字なので、印刷に困るだらう

と思つて、引用しないのである。序でにいふと、この丹後風土記の浦島には、雨降り星といふものが出て来るが、搜神記巻四の初には「雨師者、畢星也」と出て来る。

このやうな徴候は、或は搜神記が、記・紀・風土記の成るころに、説話の潤色、変形に参加してゐるのではないかといふ疑ひをいだかせる。ここで搜神記といつてゐるのは二十巻本のことである。八巻本は稍々後世のものとみられるから、ここには関係ない。陶淵明の撰と伝へる統搜神記も、ここでは問題にしない(信用しない)。だが、二十巻本搜神記は法苑珠林との縁もあり、或は早くから日本人に知られてゐたかもしれない。

* 正直に云つて、私は最近、別の問題に追はれてゐるために、かういふ説話の比較研究に首を突っ込んでゐるいとまがないのである。しかし、今や、この前野直彬氏の「六朝唐宋小説集」の名訳がある以上、もう大して漢文の学力を要せず、これを足場にして古代説話の比較研究は、誰にでもできる時代になつてゐるのであるといふことは、ここで声を大にして置く方がよからう。

例へば、同書七七頁以下に収まつてゐる「古鏡の話」は初唐の名高い伝奇であり、魯迅校録唐宋伝奇集、鄭振鐸編中国短篇小説集第一集、太平広記巻第二百三十、等にあるが、いま、この太平広記から訳出された暢達な訳文によつて考へ得ることの數々は、原文をたどたどしく追つてゐるの比ではない。この古鏡記によつて、玉や鏡や劔に靈異を感じた者が、決して日本の三種の神器ばかりでないことをつづきに知ることができ、思ひを遠く大陸との交渉に馳せることができる。この古鏡が、叢雲を起し稻妻をはためかせて大蛇を退

治するありさまは、日本の八岐の大蛇の宝劔伝説を思はせるものがある。

倭漢朗詠集に「壺中ノ天地ハ乾坤ノ外」(仙家)とある、あの壺公が費長房を鍛へる話も神仙伝中の一話として同書に太平広記巻十二から訳出されてゐるが、みると、壺公は長房を、「たくさんの蛇が来」る「石室」に入れた、とある。さういひはれてみれば、思ひだすのは古事記の須佐之男ノ命が、婿の大穴牟遲ノ神を蛇の室に入れた話である。試練の方法が似てゐる。(同書三七頁)

ああ、書いてゐると、きりががない。かかる次第であるから、以下は読者諸兄姉、自身探査に着手されてはいいが、といふわけである。(九月十四日)

会 員 消 息 (昭和三十七年度)

太 田 善 麿 「古代日本文学思沙論」Ⅱ・Ⅲ

桜楓社刊行

青 木 生 子 文学博士の学位取得

賀 古 明 同

鴻 巣 隼 雄 同